

東京小品

芥川龍之介

青空文庫

鏡

自分は無暗^{むやみ}に書物ばかり積んである書齋の中に蹲^{うづくま}つて、寂しい春の松の内を甚^{はなはだ}だらしなく消光してゐた。本をひろげて見たり、好い加減な文章を書いて見たり、それにも飽きると出たらめな俳句を作つて見たり——要するにまあ太平の逸^{いつみん}民らしく、のんびんだらりと日を暮してゐたのである。すると或日久しぶりに、よその奥さんが子供をつれて、年始^{かたがた}々々遊びに來た。この奥さんは昔から若くつてゐたいと云ふ事を、口癖のやうにしてゐる人だつた。だからつれてゐる女の子がもう五つになると云ふにも関^{かかは}ら

ず、まだ娘の時分の美しさを昨日きのふのやうに保存してゐた。

その日自分の書齋には、梅の花が活いけてあつた。そこで我々は梅の話をした。が、千枝ちえちゃんえと云ふその女の子は、この間あひだち中う書齋がくの額かけや掛物ものを上眼うはめでちらちら眺めながら、退屈さうに側に坐つてゐた。

暫しばらくして自分は千枝ちゃんえが可哀かはいさうになつたから、奥さんに「もうあつちへ行つて、母とでも話してお出でなさい」と云つた。母なら奥さんと話しながら、しかも子供を退屈させない丈だけの手腕があると思つたからである。すると奥さんふところは懷かから鏡かみを出して、それを千枝ちゃんに渡しながら「この子のかうやつて置きさへすれば、決して退屈しないんです」と云つた。

何故^{なぜ}だらうと思つて聞いて見ると、この奥^{おく}さんの良人^をが逗子^{づし}の
 別荘^{やまい}に病^{やまい}を養つてゐた時分、奥^{おく}さんは千枝^{ちえ}ちゃんをつれて、一週
 間に二三度宛^{づつ}東京逗子間^{とうし}を往復したが、千枝^{ちえ}ちゃんは汽車の中で
 その度に退屈し切つてしまふ。のみならず、その退屈^{まぎ}を紛らした
 い一心^{いんきよ}で、勝手な悪^{いたづら}戯^ごをして仕方がない。現に或時はよその御
 隠居^{いんきよ}様をつかまへて「あなた、仏蘭西語^{フランス}を知つていらつしやる」
 などととんでもない事を尋ねたりした。そこで奥^{おく}さんも絵本を渡
 したり、ハモニカをあてがつたり、いろいろ退屈させない心配を
 したが、とうとうしまひに懷^{ふところ}鏡^{かがみ}を持たせて置くと、意外に
 も道中^{だうちう}おとなしく坐つてゐる事實を発見した。千枝^{ちえ}ちゃんはそ
 の鏡^{のぞ}を覗きこんで、白粉^{おしろい}を直したり、髪^かを搔いたり、或は又わ

ざと顔をしかめて見り、鏡の中の自分を相手にして、何時^{いつ}までも遊んでゐるからである。

奥さんはかう鏡を渡した因^{いん}縁^{ねん}を説明して、「やつぱり子供ですわね。鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんですから。」とつけ加へた。

自分は刹^{せつ}那^なの間^{あひだ}、この奥さんに軽い悪意を働かせた。さうして思はず笑ひながら、こんな事を云つて冷^{ひや}評^かした。

「あなただつて鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんぢやありませんか。千^ち枝^えちゃんとは違ふのは、退屈なのが汽車の中と世の中だけの差別ですよ。」

下足札

これも或松の内の事である。Hと云ふ若い^{アメリカ}亜米利加人が自分の家へ遊びに来て、いきなりポケットから^{げそくふだ}下足札を一枚出すと、
 「何だ^{なん}かわかるか」と自分に問ひかけた。下足札はまだ木の^{にほひ}匂がする程新しい板の^{おもて}面に、俗悪な太い字で「雪の十七番」と書いてある。自分はその書体を見ると、何故か^{なぜ}両^{りやうごく}国の橋の^{たもと}袂へ店を出してゐる^{あまざけや}甘酒屋の赤い荷を思ひ出した。が、元より「雪の十七番」の^{いんねん}因縁などは心得てゐる筈がなかつた。だからこの^{こんに}蒔^{やくもんだふ}問^{うんすゐ}答の雲水めいた相手の顔を眺めながら、「わからないよ」と簡単な返事をした。するとHは鼻眼鏡の後から妙な^{またた}瞬きを

一つ送りながら、急ににやにや笑ひ出して、

「これはね。或芸者の記念品なんだ。」

「へへえ、記念品にしちや又、妙なものを貰つたもんだな。」

自分たちの間には、正月の膳が並んでゐた。Hはちよいと顔を

しかめながら、屠蘇の盃へ口をあてて、それから吸物の椀を持つ

た儘、びび々としてその下足札の因縁を辯じ出した。――

何でもそれによると、Hの教師をしてゐる学校が昨日赤坂の

或御茶屋で新年会を催したのださうである。日本に来て間もない

Hは、まだ芸者に愛嬌を売るだけの修業も積んでゐなかつたか

ら、唯出て来る料理を片つぱしから平げて、差される猪口を片つ

ぱしから飲み干してゐた。するとそこにゐた十人ばかりの芸者の

中に、始終彼の方はうへ秋波しうはを送る女ひとりが一人あつた。日本の女は踝くるぶしから下を除いて悉く美しいと云ふHの事だから、勿論この芸者も彼の眼には美人として映じたのに相違ない。そこで彼も牛飲馬食ぎういんばしょくする傍かたはらには時々そつとその女の方を眺めてゐた。

しかし日本語の通じないHにも、日本酒は遠慮なく作用する。彼は一時間ばかりたつ中うちに、文字通り泥酔でいすゐした。その結果、殆ど座に堪へられなくなつたから、ふらふらする足を踏みしめてそつと障子しやうじの外へ出た。外には閑静な中庭が石燈籠いしどうろうに火を入れて、ひつそりと竹の暗をつくつてゐる。Hは朦朧もうろうたる酔眼すゐがんにこの景色を眺めると、如何いかにも日本らしい好いい心もちに浸ひたる事が出来た。が、この日本情調が彼のエキゾテイズムを満足させた

のは、ほんの一瞬間の事だつたらしい。何故なぜと云ふと彼が廊下ろうかへ出るか出ないのに、後あとを追つてするすると裾を引いて来た芸者のひとりひとりが突然彼の頸くびへ抱だきついたからである。さうして彼の酒臭いくちひるきよ唇くちひるきよへ潔い接吻をした。勿論もちろんそれはさつきから、彼に秋波を送つてゐる芸者だつた。彼は大おほいに嬉しかつたから、両手でしつかりその芸者を抱いた。

ここまでは万事が頗る理想的に発展したが、遺憾ながら抱だくと同時に、急に胸がむかついて来て、Hはその儘その廊下へ甚だ尾籠ろうながら嘔吐へどを吐いてしまった。しかしその瞬間に彼の鼓膜こまくは「私はX子と云ふのよ。今度御独りでいらした時、呼んで頂戴」と云ふ宛転ゑんてんたる嬌声けうせいを捕へる事が出来た。さうしてそれを耳

にすると共に、彼は恰も天使の樂聲がくせいを聞いた聖徒セイントのやうに昏こんとして意識を失つてしまつたのである。

Hは翌日の午前十時頃になつて、やつと正氣しやうきに返る事が出来た。彼はその御茶屋の一室で厚い絹布けんぷの夜具に包まれて、横になつてゐる彼自身を見出した時、すべてが恰も一世紀以前の出来事の如く感ぜられた。が、その中でも自分に接吻した芸者の姿ばかりは歴々として眼底に浮んで来た。今夜にもここへ来て、あの芸者に口をかけたら、きつと何を措おいても飛んで来るのに違ひない。彼はさう思つて、勢ひよく床の中から躍り出た。が、酒に洗はれた彼の頭脳には、どうしてもその芸者の名が浮んで来ない。名前もわからない芸者に口がかけられないのは、まだ日本の土を踏ん

で間まもない彼と雖いへども明白である。彼は床の上に坐つた儘、着換をする元氣も失つて、
 悵ちやうぜん然いたづと徒らに長い手足を見廻した。――
 「だから、その晩の下足げそく札ふだを一枚貰つて来たんだ。これだつてあの芸者の記念品スヴニールにや違ひない。」
 Hはかう云つて、吸物碗すゐものわんを下に置くと、松の内にも似合はしくない、寂しさうな顔をしながら、仔細しさいらしく鼻眼鏡をかけ直した。

漱石山房そうせきさんぼうの秋

夜寒よさむの細い往来わうらいを爪先つまさき上あがりに上あがつて行くと、古ぼけた板屋

根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが、柱に掲げた標^{かか}札^{うさつ}の如きは、殆ど有無^{ほとんうむ}さへも判然しない。門をくぐると砂利^{じやり}が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々^{ふんぶん}として乱れてゐる。

砂利と落葉とを踏んで玄関へ来ると、これも亦古^{また}ぼけた格子戸^{かうしど}の外^{ほか}は、壁と云はず壁板^{したみ}と云はず、悉く蔦^{ことごとつた}に蔽^{おほ}はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴^{ベル}の鈕^{ボタン}を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴^{ベル}を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪^{そくはつ}に結^ゆつた女中^{ひと}が一人、すぐに格子戸の掛け金を外^{はづ}してくる。玄関の東側には廊下^{ろうか}があり、その廊下の欄干^{らんかん}の外^{そと}には、冬を知らない木賊^{とくさ}の色が一面に庭を埋^{うづ}

めてゐるが、客間の硝子戸ガラスを洩れる電燈の光も、今は其処そこまでは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒先つるに吊した風鐸ふうたくの影も、反かへつて濃くなつた宵闇よひやみの中に隠されてゐる位である。

硝子戸ガラスから客間を覗のぞいて見ると、雨漏りの痕あとと鼠の食つた穴と

が、白い紙張りの天井てんじやうに斑々はんぱんとまだ残つてゐる。が、十畳

の座敷には、赤い五羽鶴ごはづるの毯たんが敷いてあるから、畳の古びだけはぶんみやうぶんみやう分ぶん明めいでない。この客間の西側こしよく（玄関寄り）には、更紗さらさの唐から

紙みが二枚あつて、その一枚の上に古色こしよくを帯びた壁懸けが一つ

下つてゐる。麻の地に黄色ゆりに百合ゆりのやうな花を繡ぬいつたのは、津田つだ青楓氏いふうか何かの図案らしい。この唐紙からかみの左右の壁際かべぎはには、余

り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎ
 つしり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺
 つぶうけい てつがうし
 風景な鉄格子の西洋窓の前に大きな紫檀したんの机を据ゑて、その
 上に硯すずりや筆立てが、紙絹しけんの類や法帖ほふてふと一しよに、存外ぞんぐわい行ぎやう
 儀ぎよく並べてある。その窓を剩あました南側の壁と向うの北側の壁
 とには、殆ど軸ほとんの挂かかつてゐなかつた事がない。蔵沢ざうたくの墨竹ぼくちく
 が黄興くわうこうの「文章ぶんしやう千古事せんこのこと」と挨拶あいさつをしてゐる事もある。
 もくあん はなひらくばんこのはる
 木庵の「花開万国春」が呉昌蹟ごしやうせきの木蓮もくれんと鉢合はちあはせを
 してゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書画は独りこれらの軸
 ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎やすゐそうたらう氏の油絵の風景画が、
 さいとうより
 東側の壁には斎藤与里氏の油絵の艸花くさばなが、さうして又北側の壁

には明月めいげつぜんじ禪師の無絃琴むげんきんと云ふ艸書さうしょの横物よこものが、いづれも額になつて挂かかつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶どうへいに梅もどきが、或は青磁せいじに菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間まへ転じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙からかみも何もないのだから、実は一つ座敷も同じ事である。唯此処ここは板敷で、中央に拵はういつけんげた方一間あまりの古絨毯ふるじゅうたんの外ほかには、一枚の畳も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁には、新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床ゆかの上へ積んである数かずも少

くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法
 帖だの画集だのが雑然と堆く盛り上つてゐる。だから中央に敷
 いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手なる
 べき赤い色が僅ばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には
 小さい紫檀の机があつて、その又机の向うには座蒲団が二枚重ね
 てある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の
 茶箕、その中の万年筆、それから玉の文鎮を置いた一綴りの
 原稿用紙——机の上にはこの外に老眼鏡が載せてある事も珍
 しくない。その真上には電燈が煌々と光を放つてゐる。傍に
 は瀬戸火鉢の鉄瓶が虫の啼くやうに沸つてゐる。もし夜寒が甚し
 ければ、少し離れた瓦斯煖炉にも赤々と火が動いてゐる。さうし

てその机の後、二枚重ねた座蒲団の上には、何処か獅子を想はせる、背の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を翻したりしながら、端然と独り坐つてゐる。：

漱石山房の秋の夜は、かう云ふ蕭條たるものであつた。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

東京小品

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>